

# 楽しく音楽にかかわり、生き生きと表現できる子をめざして

足利市立南小学校 代表 竹内悦朗

## I 研究主題について

### 1 音楽科教育のめざすもの

平成14年度から実施されてきた完全学校週5日制とこれに対応した新学習指導要領も、今年で3年目をむかえている。この新しい学習指導要領は、教育課程審議会の〈答申〉(平成10年7月)に示された「教育課程の基準の改善の基本的なねらい」及び「音楽科改善の基本方針」並びに「音楽科改善の具体的事項」に示された内容の趣旨に沿って作成されている。そこでは、次のような観点が重視されている。

ア 音楽を愛好する心情と音楽に対する豊かな感性を育てるとともに、音楽活動に必要となる基礎的な能力を培い、豊かな情操を養うことを一層重視する。

イ 子供たちが楽しい音楽活動を通して、表現や鑑賞の能力を高めるとともに音楽活動の喜びを味わい、生涯にわたって音楽に親しむ態度や意欲を育成することを重視する。

ウ 学校や子供の実態に応じた弾力的な指導を進めることにより、子供たちがゆとりをもって音楽活動に取り組むとともに、個性的で創造的な学習活動をより活発に行うようにする。

新しい音楽科は、子供たちと音楽の望ましいかかわりを求めるとともに、楽しい活動を通して、生涯にわたって音楽に親しみ、生活を明るく豊かなものとしていくための素地となる能力の育成を一層重視していると言える。

また、小学校音楽科の新しい教科目標は下記のように改善されている。

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

この目標は、従前の目標と比較してみると構造的な面ではほとんど変わっていないが、「音楽の基礎」を『音楽活動の基礎的な能力』と改めて示していることや、「心情」と「感性」に代表される情意的な側面の育成を一層重視し、能力的な側面の育成と入れ換えて示していることに大きな特徴があると言えよう。

さて、21世紀をむかえた子供たちを取り巻く環境は複雑になるばかりである。科学技術の飛躍的な発展、国際化・情報化の進展、複雑な人間関係が進んでいる中で、人間関係の基盤である協調性・自立性・社会性などを音楽活動を通して育てていくことが、音楽教育が学校教育の中で果たす大きな役割をになっているといっても過言ではないと思われる。また、そのような力を育てていくことがまさに「生きる力」になる原動力だと考える。



## 2 主題の設定について

### (1) 南小の教育

本校の教育目標「自ら学ぶ力 思いやる心」は、下記に示すように「生きる力」の具現化に即した目標であると言える。

- ・自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力の育成
- ・自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心、生命や人権を尊重する心、感動する心など、豊かな人間性の育成



この目標の実現に向けて、全教職員が地域や家庭と密接な連携を取りながら、全教育活動を通して取り組んでいるところである。また、昭和48年の開校以来受け継がれている「響く心 湧く力」という教育理念に基づき、良き伝統をふまえつつ、地域や学校の特色を生かし、児童の実態をふまえながら「生きる力」を育む特色ある教育活動を展開している。

本校は、平成16年度の栃小教研足利支部音楽部会の会場校を引き受け、平成15年度から研究に取り組んできた。1年次は、児童の実態の把握や授業を中心とした授業研究を中心に、2年次は、より発展的な授業研究や音楽集会などを中心にした実践を積み重ねてきた。

### (2) 児童の実態と指導の反省

主題を設定するにあたり、児童の実態をアンケート調査や観察により次のように分析した。

- ・音楽が好きであるという児童は多いが、高学年になるにつれてその割合は減少していく。主な理由としては、「表現することに自信がないから」や「恥ずかしいから」などである。
- ・低学年では歌唱や身体表現の活動を好み、高学年では器楽や鑑賞の活動が好まれている。
- ・創作表現活動は、全体的に好まれていない。その理由としては、「どのように表現したらよいかわからないから」とか「あまりやったことがないから」などであった。
- ・学習形態としては、クラスで活動することが好まれており高学年になるほどグループ活動を好む傾向が強い。全体としては、一人で演奏するような個人での活動は好まれていない。
- ・歌唱及び器楽ともに個人の表現の能力の差が大きい。これは、高学年になるほど著しくなる傾向がある。
- ・地域の特性や家庭環境などにより、情意的な支援を必要としている児童が少なくない。

以上のような児童の実態の把握とともに、我々教師のこれまでの指導の反省も行った。「音楽は楽しいもの」「音楽の時間は楽しい時間でありたい」という願いは、私たち音楽にかかわる教師が絶えずもっている永遠の願いとも言える。ところが、現実には楽しいはずの音楽の時間が、そうではない時間になっていたことも否定できないものがある。そこで、下記のように従前の指導についてふりかえてみた。

- ・「音楽を教える」という意識が先になり、本来の楽しい音楽活動と遊離し、技能や知識理解が先行してしまう傾向があった。
- ・学習指導が表現技能の修得に偏り、演奏の仕方や曲想表現など、教師の画一的な教え込みが強調されすぎていた。
- ・楽曲を仕上げることに重点を置くあまりに、音楽活動の過程を大切にすることを忘れがちであった。
- ・音楽専科や交換授業による音楽の指導の経験の偏りや、教師の指導法の未熟さが見られた。

(3) 研究主題の設定

音楽科教育の求めているものや児童の実態、教師のこれまでの指導のふりかえり等を総合的に検討し、次のような研究主題が設定された。

『楽しく音楽にかかわり、生き生きと表現できる子をめざして』



II 研究にあたって

1 研究の仮説

研究を始めるにあたり、次のような仮説を考えてみた。

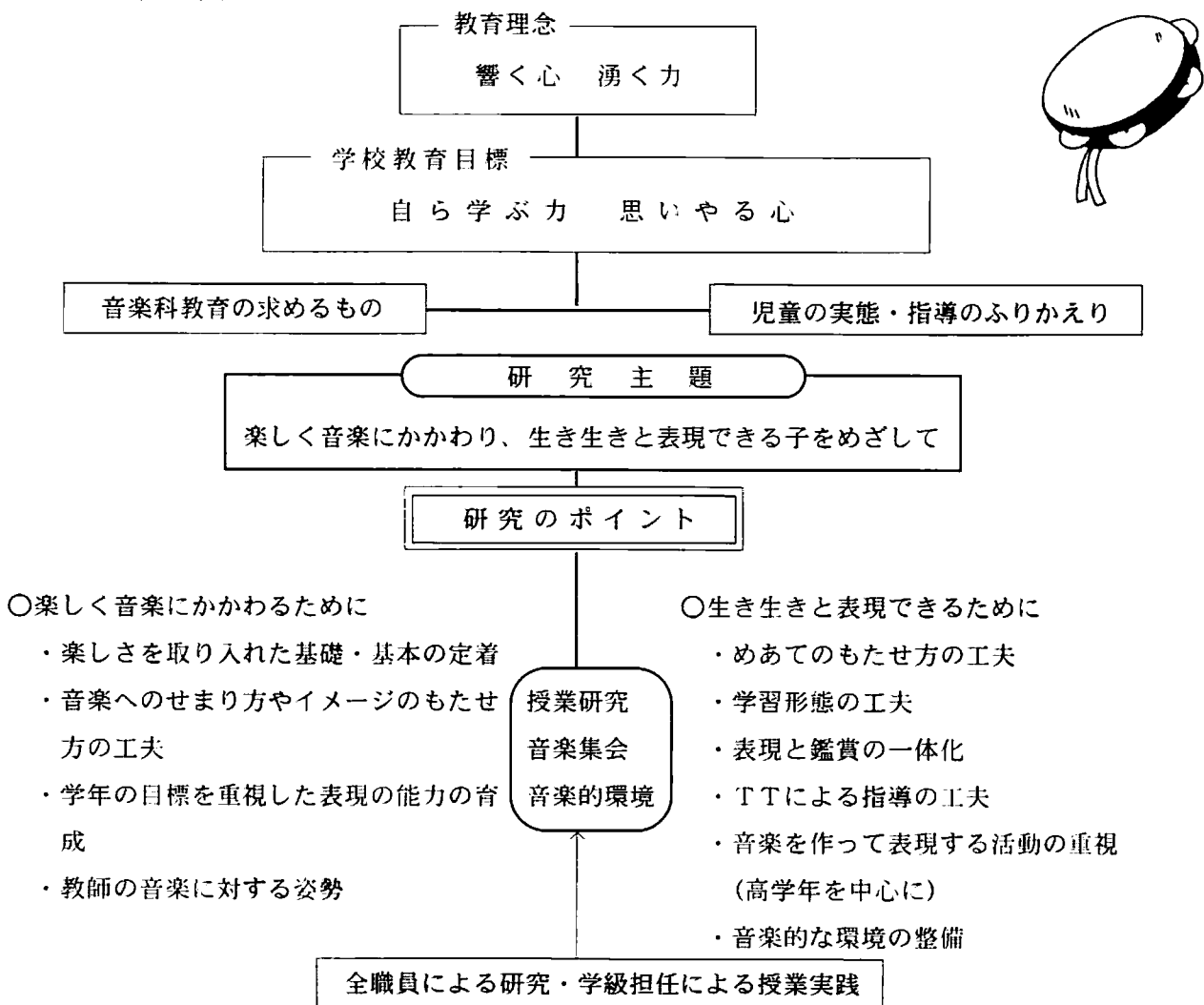
【仮説 1】

楽しく音楽にかかわることで、生涯にわたって音楽に親しみ、生活を明るく豊かなものにしていくための素地となる能力の育成がはかれるのではないか。

【仮説 2】

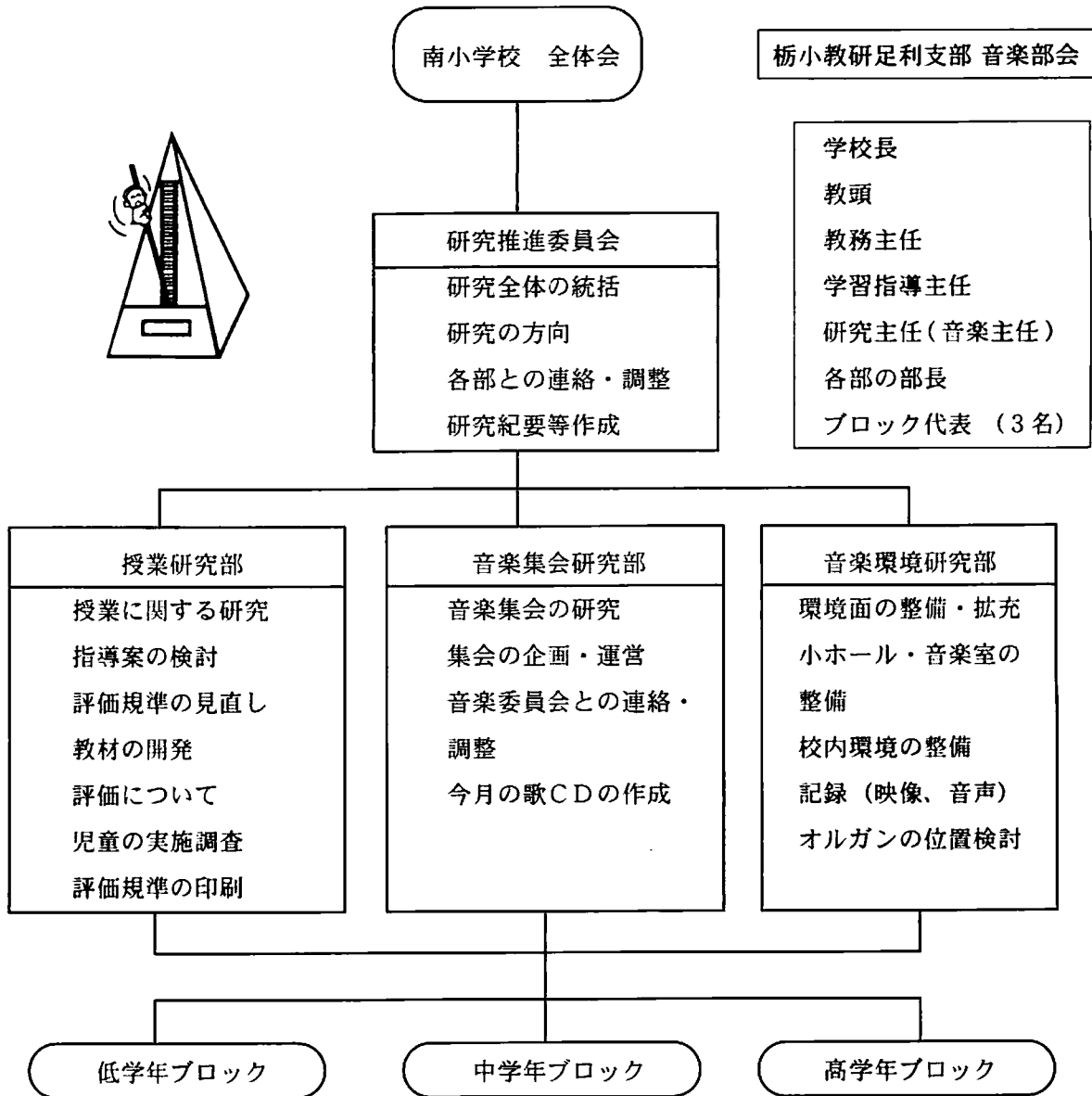
生き生きと表現できる力が身に付けば、子供たちが自分の良さを発揮しながら、主体的で創造的な学習活動をより活発に展開することができるのではないか。

2 研究構想図



### 3 研究組織

研究を始めるにあたり、音楽専科や音楽の授業交換をなくし、学級担任による音楽の授業実践を基本に研究を進めることとした。ピアノの技能に卓越した教師や歌唱表現の長けた教師が授業を進めていくのもいいが、本校は全員で研究するという姿勢を重視し、音楽の授業はすべて学級担任が行うものとした。当然、ピアノがまったく弾けない教師もいれば、ここ十数年音楽の授業をしたことのない教師もいる。研究の歩みは短くゆっくりとしたものになるかもしれないが、全職員で着実に少しでも向上していける研究でありたいと願う。



### III 研究の実際

#### 1 研究のポイント

研究の実践の中で、仮説を検証するために以下に示すような具体的なポイントを設けた。

##### (1) 楽しく音楽にかかわるために

###### ① 楽しさを取り入れた基礎・基本の定着

創造的な音楽活動が展開されるためには、表現及び鑑賞の活動ができる音楽的な能力がしっかりと身に付いていることが必要である。子供が自ら音楽を感じ取り進んで活動するのに必要な音楽の能力は、基礎的・基本的な内容として総合的に培われるものである。具体的には、声を出して歌を歌う、楽器を演奏する、自分なりの音楽を創造したりする経験によって得られる能力や知識、鑑賞することなどである。小学生の活動は、楽しいことが必要である。遊びを通じた活動の中にも、十分に音楽活動の基礎的な能力を培っていくことができると考えた。この活動を授業の中に位置付け、継続的に指導していくことにした。



###### ② 音楽へのせまり方やイメージのもたせ方の工夫

音楽科の目標の中の重要なキーワードとして「音楽に対する感性」という文言がある。音楽に対する感性とは、音楽的感受性にとらえることができる。この音楽的感受性とは、リズム感、旋律感、和声感、強弱感、速度感、音色感など、感覚的に受容される音楽の諸要素に関する刺激に対して、音楽的に反応するなど、表現や鑑賞の活動の根底となるものと理解できる。豊かな感性を育てていくためには、楽曲や音楽との出会い方が重要であると考えた。具体的には、絵や写真を利用した導入や、楽曲についてインターネットを利用して調べるなどして音楽と出会うことにより、教師の一方的な価値観の押しつけにならないよう子供の柔軟な感性を働かせていきたい。

###### ③ 学年の目標を重視した表現の能力の育成

新学習指導要領の目標の表現の能力に関する項では、各学年別に指導の重点が次のように示されている。

- ・低学年…リズムに重点を置いた活動
- ・中学年…旋律に重点を置いた活動
- ・高学年…音の重なりや和声の響きに重点を置いた活動

これらの活動を子供の発達段階に応じて、しっかりと展開していくことは非常に重要なことである。低学年では「能力を育て」、中学年では「能力を伸ばし」、高学年では「能力を高め」というように子供の発達に応じた観点に基づいた活動を展開していきたい。

###### ④ 教師の音楽に対する姿勢のあり方

子供に向かって「音楽を愛好する心情を育てよう」と言っても、教えている教師の方がそのような心情がなかったり、また、持とうと思っていなかったとしたら本末転倒である。子供が楽しく音楽にかかわり、音楽の活動をする喜びを得るためには、教師がまずその姿勢を持たなければならない。教師が進んで歌う、子供といっしょに演奏する、といった姿勢は、必ず子供の心に反映されるものだと考える。



## (2) 生き生きと表現できるように

### ① めあてのもたせ方の工夫

個性的で創造的な音楽活動の充実をめざすためには、課題意識を高め、自分のペースでじっくりと取り組むような学習の進め方ができるとよい。子供一人一人の音楽表現に対する課題意識を育てることを重視し、それぞれのペースで課題に取り組むような学習を進めるとともに、個々の興味や技能の実態を生かすような支援のあり方を工夫していきたい。具体的には、学習の流れや経過がわかる作業用紙の工夫、一人一人に応じた支援の工夫、音楽的アプローチと表現とのかかわりの経験の積み重ねなどがあげられる。

### ② 学習形態の工夫

効果的な学習活動が展開されるためには、活動内容によって個人・ペア・グループ・一斉など学習形態を選択していくことが必要である。基礎的な事項をしっかりと身に付けさせたい時、グループ活動などで子供の個性が生かせるような場を設定したい時など、さまざまである。授業時数が約3割も削減された高学年の指導においては、学習の効率性を高めることも大切なことである。さらに、高学年で取り扱われている「表現形態の選択」という学習がより効果的に展開されるためにも重要となっている。子供一人一人がかがやき創造性が発揮されるよう、適切な学習形態を十分考慮していきたい。



### ③ TTによる指導の工夫

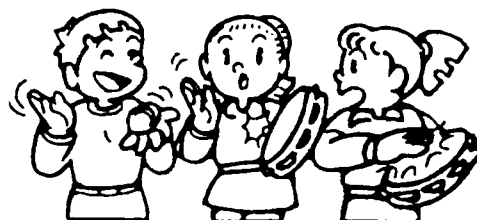
本校には、幸運にも心の教育相談員、学びの指導員などの方が多数勤務されている。複数の教師が協力することにより、個に応じた指導が実現されやすくなる。広がりのある教材研究、多様な学習活動の設定、子供一人一人の良さや可能性の把握などの点において、TTによる指導はたいへん有効であると考えている。

### ④ 表現と鑑賞の一体化

人間は歌を歌う時、楽器を演奏する時、絶えず自分の耳で発音される音を聴いて（あるいは予想して）演奏している。音楽活動の能力とは、表現と鑑賞の活動ができる音楽的な諸能力で、両者は一体となって作用するものであり、しかも、相互に高め合うものだと言える。具体的には、表現する子供とそれを享受する子供とが共感しあい、互いに高め合えるような活動の場を設定していきたい。

### ⑤ 音楽をつくって表現する活動の重視（高学年を中心に）

音楽をつくって表現する活動は、音楽の諸能力を十分に発揮することが求められる。従って、音楽をつくって表現することは、あらゆる音楽活動の基盤となるものであり、全学年を通して連続的、発展的に展開されることが望ましい。特に高学年では、自由な発想を生かした音楽づくりを進める中で、聴く活動を効果的に位置付け、音楽を特徴付けている諸要素に対する意識を一層高めて表現の美しさを練り上げるとともに、音や音楽による自己表現の幅を広げていくことが大切である。これは、高学年だけに限定されたものでなく、低学年のうちから即興表現なども含めたつくって表現する活動を重視していきたい。



⑥ 環境の整備

個性的で創造的な音楽活動は、音楽の授業のみに展開されるものではない。学校生活すべてが活動の場である。音楽集会や学年集会などの集いの場、さまざまな校内放送としての音楽の存在、朝の会や帰りの会などの学級活動など、実にさまざまな音楽環境が子供たちを支えている。子供たちがゆとりのある環境の中で、楽しい音楽活動が経験できるようにすることを一層重視し、環境の整備を進めていきたい。

(3) 学習活動の過程と研究のポイント

本研究を始めるにあたり研究推進委員会では次のような学習活動の過程と研究のポイントの関連を提示し、全職員で共通理解をはかり研究を開始した。

学習活動の過程		研究のポイント
①	楽曲や音との出会い	音楽へのせまり方やイメージのもたせ方の工夫
②	思いや願いをもつ	評価・環境整備
③	課題をもつ	
④	表現を工夫する	
⑤	よさを認め合う	
⑥	よりよい表現を工夫する	めあてのもたせ方の工夫
⑦	発表の仕方を工夫する	楽しさを取り入れた基礎・基本の定着 学年の目標を重視した表現の能力の育成 学習形態の工夫 TTによる指導の工夫
⑧	発表会を開くなど学習のまとめをする	表現と鑑賞の一体化
		音楽をつくって表現する活動の重視
		表現と鑑賞の一体化

(4) 評価規準と指導計画の作成

音楽の学習では、子供たちが深い音楽的な感受をもとに自ら考え判断し、工夫して表現したり、互いの表現のよさに共感し合ったりするような学習活動を、教師が共感的に支援し、指導と一体となった評価を進めていく必要がある。

本校でこのような評価を進めていくために、表現と鑑賞の領域を相互に関連づけながら、指導計画と評価計画が一体となったものを作成した。

## 2 研究の経過

【平成15年度】

月	日	内 容
4	30	研究組織、研究テーマなど研究の方向についての話し合い
5	7	指導案形式の確認と2年・4年・6年指導案検討
	14	研究授業（2年・4年・6年）と研究協議 《学校間協同推進》
	21	研究授業（1年・3年・5年）と研究協議 《学校間協同推進》
	23	第1回研究推進委員会
6	11	研究授業（2年・4年・6年）と研究協議 《学校間協同推進》
	18	研究授業（1年・3年・5年）と研究協議 《学校間協同推進》
8	1	音楽主任による音楽の実技研修（コンピュータを使った教材作りなど）
9	17	研究授業（2年・4年・6年）と研究協議 《学校間協同推進》
10	8	音楽主任による音楽の実技研修（打楽器の奏法）
	30	研究授業（1年・3年・5年）と研究協議 《学校間協同推進》
11	18	3部会話し合い
	20	第2回研究推進委員会
1	18	研究テーマの見直しと本年度の研究の成果と課題についての話し合い
	28	本年度の反省と次年度に向けての話し合い
2	4	次年度の研究の方針について

【平成16年度】

月	日	内 容
4	5	本年度の研究の方向について
	12	第3回研究推進委員会
5	14	研究授業（4年・6年）と研究協議 《学校間協同推進》
6	2	第4回研究推進委員会
	9	研究授業（1年・3年・5年）と研究協議 《学校間協同推進》
	16	研究授業（2年・4年・6年）と研究協議 《学校間協同推進》
	30	研究授業（1年・3年・5年）と研究協議 《学校間協同推進》
7	28	安足教育事務所 須藤 浩之先生による音楽の実技研修（歌唱指導）
8	3	第1回指導案検討（上学年・下学年ブロック別）
		音楽主任による音楽の実技研修（キーボードの操作法と効果的活用）
9	8	音楽主任による音楽の実技研修（打楽器の奏法）
	15	第5回研究推進委員会
	22	第2回指導案検討（上学年・下学年ブロック別）
10	6	研究授業（1年・5年）と研究協議 《学校間協同推進》
	12	3部会話し合い、第3回指導案検討
	13	第6回研究推進委員会
	15	研究授業（2年・4年・5年）と研究協議
	18	研究会準備
	22	研究紀要、指導案完成
	25	第7回研究推進委員会
11	9	公開授業（栃小教研足利支部音楽指導法研究会）
2	2	音楽研究のまとめ



### 3 授業実践例

#### (1) 基礎・基本を楽しく定着させる工夫をした例

【第2学年「音楽に合わせて～かっこう～」から】

##### ① 楽しさを取り入れた基礎・基本の定着

低学年の児童は、リズム遊びや身体表現が大好きである。授業の導入では、ハンドサインとリズム遊びを取り入れ、楽しみながら音の高さやリズムの音楽的な感覚を身に付けさせたいと考えた。ハンドサインでは、ド（膝）→レ（腰）→ミ（胸）→ファ（肩）→ソ（耳）→ラ（頭）のように、音の高さを手の位置や形で表すことで、総体的な音の高さを感覚的にとらえることができた。また、音の体操として身体を動かすことにより、リラックスして授業にのぞめた。リズム遊びでは、T2の教師が打つリズムに合わせて身体表現をする活動を取り入れた。児童は、膝打ち→拍手、拍手→友達との手合わせ、左右のステップなどの活動を通して、拍の流れを感じ取ったり、さらに自分の考えた方法で表現したりするなど、豊かな表現へと結びついてきている。

##### ② 学習形態の工夫

はじめに、個人の活動として、一人一人が自分のイメージする音を探す活動を取り入れた。自分で楽器を選んで音色を聴き、同じ楽器でも演奏の仕方により音色が変わることや、強拍部と弱拍部にはどの楽器の音色が適しているかを考えさせていくことで、音に積極的に関わっていけることができると考えた。初めは大太鼓やシンバルなどこれまでにあまり演奏したことのない楽器を選ぶ児童が多かったが、友達とバッテリーリズムを打ったり音を聴き比べたりするうちに、音の強さや音色に対する意識が芽生えてきた。

次に、個人の活動で探した音をグループに持ち帰り、お互いにバッテリーリズムを打って聴き合う活動を設定した。強拍部と弱拍部に選んだ楽器をグループ内で出し合い、発表したい組み合わせを選んで練習させた。児童は、自分とは異なる楽器の組み合わせを知り、音色や強弱に対する感覚を深めることができた。

また、本時の学習では、鍵盤ハーモニカによる旋律の演奏とバッテリーリズムによる伴奏の担当を分担して演奏している。互いの音を聴き合って合わせる表現活動を通して、音の大きさ・リズム・きれいな音の3点をグループ内で評価しながら練習できるように、提示カードを作り意識づけを図った。

##### ③ TTによる指導の工夫

導入の3拍子のリズムに合わせて身体表現をするリズム遊びの活動では、T1が身体表現を担当し、T2はリズム打ちを担当している。低学年の授業では、はっきりとリズムがわかり音の強弱がつけやすいリズム楽器を使うことにより、強拍部と弱拍部を感じ取れるようにした。

本時のめあてを確認する活動では、二人の教師で強拍部と弱拍部のバッテリーリズムの例を示すことにした。児童が自分の活動を視覚的にイメージすることができ、効果的であった。

グループ活動の場面では、担当グループを予め分担し同質の支援をできるようにした。支援の必要な児童の補助を中心にする場面や、楽器の組み合わせや音の強弱などの支援を中心にする場面など、二人の教師で支援の視点を共有することにより、児童も安心して学習に取り組むことができた。

(2) 音楽へのせまり方やイメージのもたせ方を工夫した例

【第3学年「ようすを思いうかべて-ふじ山-」から】

① 児童の実態の把握

学習前に一人一人の児童の生活経験や興味・関心・意欲などを知り、展開に生かすために児童の実態を調査した。児童の反応の変化を捉えるためにも役だった。

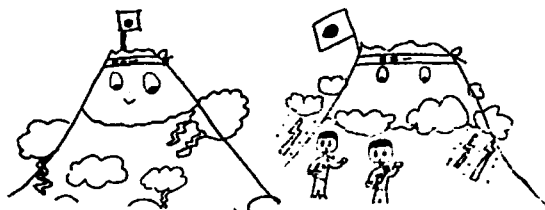
No	生活 経験 (富士山について)					興味 興味 心				歌うとき - 態度/意		
	知っているか	どんなことを知っているか	見たことがある				音楽が好きか	どんな領域が好きか			音楽の好きな理由	歌うときに気をつけていること
			写真	絵	テレビ	実際に		歌	楽器演奏	鑑賞		
1	○	日本一高い山	○	○	○		○	○	○		楽器演奏が楽しい	まちがえないように歌う
2	○	日本一高い山	○		○		○		○		いろいろな音ができるから	音程
3	○	色がきれい		○			○	○	○		きれいな歌声が好き	きれいな声、リズム

② イメージを膨らます

ア 富士山のVTRや写真の視聴

富士山については、97%の児童が、写真や絵やTVや遠くから見て知っているが、よくある姿のみで、数少ないイメージしかもっていない。そこで、地上や上空富士山の写真を視聴させた。このことで、富士山の様々な姿を知ることができ、「日本一」とは高さだけではなく、姿形や季節などの変化も美しく、それも「日本一」であることが捉えられ、曲想のイメージを感じ取らせることができた。

イ 富士山の絵を描く



歌詞を覚えさせ、教師の歌に合わせて絵を描かせた。絵を描くことによって歌詞の理解が深まり、様子を思い浮かべながら歌い方を工夫することができた。

③ グループで歌う「ふじ山」のめあての設定

- (例) ・きれいな声で、大きなふじ山をイメージして、どう  
どうと歌う  
・いろいろなふじ山を考えて、日本一の山らしく歌う

膨らませた富士山のイメージをもとに、自分たちのグループではどんな感じに歌いたいか、めあてを決めさせた。どのように歌いたいか言葉にしたことで、めあてをはっきりと捉えることができ、次にめあてを達成するための手立てを具体的に考えることができた。

④ 曲の強弱や山を考えるワークシートの工夫

旋律線を指でなぞりながら歌わせたり、自分たちの考える自由な記号を書き込ませて強弱や曲の山を工夫させた。

① だんだん高くなる 一山の高さ  
 ○だんだん高くなる  
 △せうせうと 山 山 山  
 ○きもちよく  
 ●ふじ山で、みんなが  
 きもちよく歌うし、いろいろな山に分かれていて、  
 きれいな声で、いろいろな山を歌うのしよ、  
 ●いろいろな山を、みんなが歌うのしよ、  
 大きなふじ山を、いろいろな山を、せうせうと歌う、  
 (きれいな声で歌う)

めあて ふじ山を思いうかべながら、のびのびと歌う

あたまをくもーのーうーえいじーしーはうのーまーあーあうーしーてー

○ △ ○ □ ○ △ ○ □ ○ △ ○ □ ○

あーあなりとーまーをーしーたーとーきーふじ山にーばんらうのーまー

△ ○ △ ○ △ ○

● 音楽を聞いて、みんなのよいところを見つけよう。

6はんばりきょうを、きりりとくりくり歌っていて  
大きなふじ山、山にうかんだ。

● 音楽のついで、おもしろい曲、おもしろい曲、おもしろい曲

ふじ山を思いうかべながら歌う。 (○)  
 ふじ山を思いうかべながら歌う。 (○)  
 ふじ山を思いうかべながら歌う。 (○)

これによって、曲に合う歌い方を見つけようとしていた。

(3) めあてのもたせ方の工夫

【第6学年「曲のまとまりを感じて」から】

① 曲との出会い（最初の印象）を大切にする

ア 繰り返し曲を聴き、気づいたことや感じたことをなるべくたくさん教科書のそのページに書きとめる。

イ 学習を進めながら（これまで学習してきたことを生かしながら基礎・基本の定着を図りながら）どのような気持ちで歌ったり、演奏したりしたいか書きとめていく。

ウ 特に題材のめあてにせまる部分は~~~~を引いたり、教師が補足したりする。

エ 個々のめあてからグループのめあてやクラス全体のめあてを確認していく。

「歌よありがとう」～児童の記録より～

気づいたこと・感じたこと・考えたこと	どのように歌いたいのか
<ul style="list-style-type: none"> <li>・上と下のパートに分かれている</li> <li>・声をのばして歌っている</li> <li>・高い声できれいに歌っている</li> <li>・上と下が重なりあってきれい</li> <li>・歌の内容がとてもいい</li> <li>・歌をととても大切に思っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やさしく、気持ちをこめて</li> <li>・上と下のパートがうまくあうように</li> <li>・強弱に気をつけてきれいな声で歌う</li> <li>・気持ちを込めて、楽しく歌う</li> <li>・口を大きく開けて歌う</li> <li>・息つぎをしっかりと、息をしっかりとすう</li> <li>・ひびかせて歌いたい</li> </ul>

教科書に書くことによって真剣に聴き、最初に曲をしっかりと聴くことにより、個々のイメージをふくらませることができる。

教科書に書くことによって、演奏する（歌う）時に必ず確認することができるのでめあてをもって取り組むことができる。学習を進めながら付け加えていくこともでき、教師も支援しやすい。

② 学習の流れがわかる作業用紙の工夫

「夢をのせて」～児童の記録より～

夢をのせて

（曲を聞いて気づいたこと、考えたこと、感じたことを書きとめる）

・ 気づいたこと

・ 感じたこと

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

①この1フレーズ～4フレーズまで、曲のまとまりを感じて書きとめる。

②このまとまりとしてやってみたいことを書く。


（曲を聞いて気づいたこと、考えたこと、感じたことを書きとめる）

・ 気づいたこと

・ 感じたこと

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

①この1フレーズ～4フレーズまで、曲のまとまりを感じて書きとめる。

②このまとまりとしてやってみたいことを書く。


★ 曲のまとまりを感じて★  
ふしのくり返しや変化を生かして歌おう

● 夢をのせて ●

作曲: 菅野 直子 / 編曲: 菅野 直子

2017年10月15日  
練習で書いてみよう 6年

③ 継続的なワークシートの活用 (例: リコーダー)

「エーデルワイス」 ～児童の記録より～

リコーダー練習カード

6年

日付	曲名	めあて	よくできたところ この次、気をつけること
4/16	エーデルワイス	スタカートや短くきるところは短くきり、 ① 相手にあわせて、ふくうにする。 ② 強弱を意識しよく。 ③ 息のところが息をす	① 息のところがちゃんと息が出来た。あと、強弱を意識してふくうした。

リコーダー練習カード

6年

日付	曲名	めあて	よくできたところ この次、気をつけること
4/16	エーデルワイス	① シアのシャープがよくできたからが入はる。 ② ショホをよくふくう。 ③ かつげしくふくう。 ④ かつげしくふくう。 ⑤ シアのシャープをよくふくう。	① シアのシャープができてよくできた。テンギンギンがうまくなってきた。 ② ショホよくふくう。 ③ かつげしくふくう。 ④ かつげしくふくう。 ⑤ シアのシャープよくふくう。

ワークシートに書くことにより意識的に演奏することができ、さらに良いものにするために、努力する点を見つけていくことがしやすい。

演奏が終わった時に今日の演奏を振り返り、次のめあてをメモすることにより次時にやるべきことが明確になる。

今日のめあてがわかっているので前時の活動を確認しながらすぐに演奏することができる。

回を重ねていくうちに、より高いめあてをもつことができるようになってくる。

#### 4 音楽集会について

研究主題に迫る活動の一つとして、毎月一回全校音楽集会を実施している。企画や運営は、各学年からの音楽集会委員の教師と児童会の音楽委員会の児童とが連携し、調整しながらそれぞれ役割を分担している。約20分間の集会は、入場の曲（世界にひとつだけの花）から始まり年間を通しての愛唱歌（世界がひとつになるまで）と今月の歌、学年コンサート、最後は退場曲（世界中の子どもたちが）に合わせて教室へもどるという流れである。各クラスには、今月の歌の年間一覧表や伴奏を録音したCD、個人の歌詞カードなどを配布して、いろいろな場面で活用されている。

また今年度は全校児童が歌で心をひとつにして、このひとつの輪が南小から大きく広がりますようにとの願いから『南っ子 ミュージックステージ ～南から世界へ 心はひとつ～』というテーマを掲げて、集会を盛り上げている。

平成16年度	
《 今 月 の 歌 》	
入場曲・・・	世界に一つだけの花
退場曲・・・	世界中の子どもたちが
4月……	さんぽ
5月……	グリーングリーン
6月……	ピリーズ
7月……	サモア島のうた
9月……	WAになっておどろろ
10月……	カントリーロード
11月……	大きな古時計
12月……	あわてんぼうのサンタクロース
1月……	北風こぞうのかんたろう
2月……	きみとほくのラララ
3月……	グッティグッバイ

#### 年 間 の 予 定

音楽集会	学年コンサート	お迎え学年	担当者
5 / 13	愛唱歌	2・4年	倉持・鈴木
6 / 10		3・6年	小町・大橋
7 / 8		4・5年	橋本・堀
9 / 9	愛唱歌(秘・二部)	3・6年	小町・大橋
10 / 14		2・3年	橋本・堀
11 / 11		1・6年	小町・大橋
12 / 9		2・4年	倉持・鈴木
1 / 27		1・5年	橋本・堀
2 / 10		1・5年	倉持・鈴木

## IV 研究の成果と今後の課題

この研究を通して、子供たちが音楽に向かう時の姿勢や、子供を見守る教師の姿勢に少しずつ変化が生じてきているように思う。1年半の実践によって得ることのできた研究の成果と今後の課題を、以下のように整理してみた。

### 1 研究の成果

- ・学習の導入の段階で、写真や絵を使ったイメージのもたせ方の工夫、イラストの効果的な使用などにより、子供一人一人が音楽への思いや願いをもてるようになってきた。
- ・発声練習、リズム打ち、リコーダーのアーティキュレーションを深める練習など、楽しさを取り入れた基礎・基本の能力を培う時間を授業に位置付け、継続的に取り組むことによって、子供たちに豊かな表現力が身に付いてきている。
- ・お互いの演奏を聴き評価したりアドバイスすることで、お互いに認め・励まし・支え合う音楽の仲間づくりができた。教師にも、子供とともに歌う・演奏する、伴奏をするなどの積極的な参加の姿勢が見られ、また、音楽集会も充実していく中で、みんなで音楽を楽しむ、創り上げる、味わうという音楽の喜びの本質にせまることができた。
- ・個人・グループ・一斉という学習形態の工夫、TTによる指導、表現形態の選択などにより、子供一人一人が輝き創造性を発揮できる場を設けることができた。

### 2 今後の課題

- ・音楽活動の基礎的な能力を培うということで楽しさを取り入れた基礎技能の練習に取り組んできたが、さらに内容的に工夫していく必要がある。
- ・主体的で創造的な音楽活動を求めグループ活動が多様化してくると、活動の場所の確保や音の干渉の問題、そして、評価と支援の難しさの問題が生じている。
- ・指導計画と評価計画が一体となったものを作成し加筆・訂正を加えてきた。児童の実態をよく見極め、本校の独自性がより発揮できるものをつくっていきたい。
- ・子供と教師が一体となって、全校児童が一堂に集う音楽集会を展開してきた。みんなの心がひとつになりさらに明るく豊かなものとなるよう、内容や方法について研究していきたい。
- ・みんなで取り組む研究ということで、授業実践やさまざまな研修を通して教師一人一人のレベルアップを目指してきた。今後も、効果的な歌唱指導や器楽の指導ができる力を身に付けていきたい。また、教師も音楽を愛好する心情を育てていく姿勢を忘れてはいけないと思う。

## 評

「確かな学力」の向上のため、学習指導要領の一部改正が告示され、学習指導要領のねらいの一層の実現を図ることが求められています。しかし、音楽科においては改正が行われず、また、所謂「はどめ規定」もありません。そもそも音楽科は、発展的・補足的な学習を含んでいる教科といえます。

音楽科において、「確かな学力」を育てるためには、子供が音楽の活動を通して知識を理解したり、豊かに表現するよう追究する活動を通して技能を獲得したりすることが大切になります。そのためには、教師が、まず子供の実態を把握して、子供たちに題材を通して育成すべき資質・能力を明確にし、授業ごとで扱う具体的な授業内容や教材、指導の形態、評価計画を工夫していく必要があります。

このような中、南小学校では2年間の研究を通して、子供の実態把握を基盤に据えて、10項目の「研究のポイント」を設け、「楽しく音楽にかかわり、生き生きと表現できる子」を育成するための研究に取り組んできました。

本研究では、“楽曲や音との出会い”から“発表会を開くなど学習のまとめをする”までの学習活動の過程と研究のポイントを関連させることで、子供の実態に即して、子供一人一人が主体的に音楽にかかわりながら、楽しいと実感できる音楽科の授業の在り方について研究を進めてきました。また、全学級担任が研究授業を行うなど、教師の取組姿勢を重視しながら全教職員が一体となって実践的に研究を深めています。

本研究は、音楽科の授業の工夫・改善を中心にしながら、音楽集会や校内放送、朝の会や帰りの会などの学級での活動の場などにも音楽活動を積極的に取り入れ、音楽環境の整備と工夫・改善にも努めています。

今後においても、子供一人一人が楽しく音楽にかかわり、生き生きと表現できるように、全教職員が音楽科の指導に携わりながら、子供の生活の中に生きる音楽の取組を更に工夫・改善し、音楽科教育の指導の充実が図れることを期待いたします。